

## アートは人生を救う

「アートは人生を救う」。ちょっと突拍子もないタイトルになりましたが、われわれの生活はアートとの思いがけない出会いによって、結構潤い豊かなものになったり、やや大袈裟に言えば幸福を得るキッカケになったりもするというお話です。

ことに青年期と定年退職後などの、身の状況が大きく変化する時期には、つかみどころのないアートのようなものでさえ、生きていく上でかけがえのない存在になる可能性が高いと思うのですね。

数多い作家のなかから、アンリ・ルソーと織田一磨の二人が重要な人物として注目されますが、あまり気にせずにお聞きください。ちなみに私にとってアンリ・ルソーは、美術館で30年近く作品を見守ってきたフランスの素朴派作家です。織田一磨は、私の事務所がある吉祥寺界隈に住んでいた、かなり昔の版画家です。まあお二人とも私にとっては、かけがえのない大切な守り神といったところでしょうか。

さて、われわれの周りにはアートに関するさまざまな言説が飛び交っています。横尾忠則いわく。「定年退職後は苦手なこと、イヤなこと、嫌いなことは一切やるな。心底好きなことだけをやれ」。岡本太郎いわく。「絵は美しくあってはならない。絵は心地よくあってはならない。芸術は爆発だ」。そして吹田文明いわく。「定年ほどよく出来た制度はない。もし定年がなかったら、私の人生は丸ごと学生に吸い取られてしまっていたらろう。そうしたら絵描きになる時間なんて、もう1秒も残されていなかった」。それぞれなかなか味わい深いお言葉ですね。

私自身、美術評論家の瀬木慎一先生のところへ行って「美術館を定年退職し、これからフリーの美術評論家になります」と申しあげたら「馬鹿者。こんな経済情勢で、これから美術評論家になるなんて狂気の沙汰だ」と一括されました。「お前にそんな力はない」と正面きって宣告されたのか、それとも暗に「頑張れよ」と励まされたのか。果たしてどっちだったのかいまだに分かりませんが、そうしたお言葉も一応頭の片隅に置いて、人生節目々々のアートを捉え直していきたいと思います。

### (まずはアートとの出会いから)

世の中にアート好きは大勢いますが、どんなに熱心な美術愛好家でも成人して社会に出ていくと、途端にアートとつき合うことが難しくなります。またまた吹田文明さんのお言葉です。

みんな作家を目指して美術大学を卒業していくが、3年もたつと制作しているのは15人足らず。5年もすると3-4人。中年になるころには1人か2人。その最後の一人と一

緒に、酒を酌み交わしたいねえ。そのころ私は 90 だろうけど。

アートへの情熱は、現実生活の前にもろくも突き崩されてしまいます。そうした厳しい状況のなかで、アートと一生涯仲良くつき合っていくには、一体どうしたらいいでしょう。どうにかして折り合ってつき合っていないと、アート好きの人間にはまったく何も起こりませんからね。

### (アートの仕事につく)

まず、最初に思いつくのは「アートの仕事につく」ということです。どんな職種があるかちょっと挙げてみましょう。

- ・美術教師（かつて小中学校の図工専科の先生の多くが、作家予備軍だった時代があります。学校の準備室を自分のアトリエにして、そこから上野へ 150 号くらいの大作を送り出していくわけです。いまではダメですよ。うるさい PTA、教育委員会対策で先生方はみんなヘトヘトですから）、美術教授（こちらは逆に、成功したアーティストの勲章みたいなものです。吉沢美香）、美術館学芸員、修復家、ギャラリスト、オークションスト、美術映画監督（会田誠）、美術団体職員、美術記者、美術編集者、ディスプレイ会社、美術運送、画材屋さん、額縁屋さん、画材メーカー（クサカベ古賀社長）の社員等々。結構少ないですね。それも希望する立場を手に入れるのは大変でしょうが、それでも一度こうしたポストを獲得すると、一生涯あこがれのアートと、自分のペースでつき合っていくことが保証されるわけです。
- ・アート系の効率よく稼げる仕事に就いて、余った時間を作家活動に振り向けるという、かなり要領のいい方法もあります。  
デザイナー、雑誌編集者など。（デザイナー・建築家のアート願望）
- ・当面職業とはいえなくても、とりあえずアート活動をはじめてしまうという不思議な生き方もないではありません。  
美術評論家（以前はひとつの職業として立派に成立していたのに残念です）、コレクター（鎌近、弦田平八郎）、詩人（ワシオトシヒコ）、アートウォッチャー（佐藤毅・菅木志雄）、ドキュメンタリスト、アートボランティア（草間弥生専属のアシスタント）、ギャラリー監視員、美術系 NPO 法人等。

### (アート系の仕事に就けなかった人は?)

若いころは生活の糧を得て、自分だけでなく家族も養っていかなければなりません。そのためチャンスに恵まれなければ、アート系でない「嫌いな仕事」にだって我慢して従事しなければなりません。そんなときストレスを解消してくれるのが、週末だけ画家になる日曜画家という生き方です。そこから出発して、「勤め人」と「アーティスト」の二足のワラジを

履くという、近代以降に特有の社会現象が起こってきます。

これを器用にこなすと、クリエイティブな人の人生は俄然楽しくなるわけです。つまり自分が自分自身のパトロンになるのですね。これだとどんなに下積み生活がつづいても人から責められることはなく、また決して裏切られもしません。そうでないと身内からだって「お前は才能がないのだから、いいかげんアートの道は諦めろ」と何百回いわれるか分かりませんからね。

はじめは「勤め人の自分」が「アーティストの自分」を養い、定年前後にはそれが逆転して、今度はアーティストが疲れきった「勤め人の自分」を慰めてくれるという構図です。ルソーもいまから 100 年前にそれを目指して、二足のワラジを履きはじめたということでしょうか。

アンリ・ルソーは 19 歳で働きはじめ、民間と地方公務員を合わせて 30 年以上も黙々と働いています。勤め先はパリ市役所の入市税関で、二級徴収吏（ガブルー。いわゆるドゥアニエではない）。彼の作品に「入市税関」というのがありますが、要するに市の城壁のあちこちに設けられていたゲートで通行人から通行税をとっていた下級官吏です。美化 30 年といえますから、平均寿命が飛躍的に延びた今日と比べても、労働時間はさして変わりませんね。その堅苦しい日常生活のなかで、彼は 41 歳のときに突然絵を描きはじめます。オ・ボン・マルシュのデパートで、偶然油絵の道具一式を目にしたのがはじまりだったといわれています。

A.クレマンという人のツテで、ルーブル美術館の模写許可証も取っています。彼はそれまでアートの専門教育をまったく受けたことがない「ズブの素人」だったので、名画の模写からはじめて、絵を独学で修得しようとしたのでしょう。日曜画家として二足のワラジを履いた美術史上最初の人です。

市税関の上司は、絵を描きやすいように、楽な仕事をさせてくれました。何故なら、私は 23 年間、24 時間ぶつとうおしの役目を果たして来たからです。このことを今でも感謝しています。彼らは、外国の眼からみても、フランスを、祖国を、より偉大に見せることだけを考えている一人の子供をフランスに、祖国に与えることに成功したのです。

と当時を懐かしく、また誇らしく回想しています。

### (定年後のアート)

さて、いよいよ定年退職後のアートに入っていきます。世の荒波をかいくぐり、首尾よく定年までアートを捨てずに漕ぎつけられた人々にのみ許された別世界です。ここからは、二足のワラジの「勤め人」がいなくなってしまうから、否でも応でもアートで一本立ちするしかありません。アートとその人の人生があらためて一体化していく瞬間です

ね。私が「日曜画家の巣立ち」と呼ぶ変身のときですね。

実際のところ、私自身アンリ・ルソーを気にしはじめたのは、目のまえに定年退職の影がチラつき出した平成 16 (2004) 年のことです。年齢でいえば 56 歳前後でしょうか。若い方はお分かりにならないと思いますが、サラリーマンには 50 代のなかごろになると、ちょっと不安になるというか落ち込む一時期があるのですね。

まじめにコツコツとやってきたつもりでも、あと数年で今の生活が打ち切られてしまう。無理やり根底から覆されてしまうと考えると、居ても立ってもいられない。どこでもいいから、しっかりした組織にぶら下がりたいという心境になるんですね。とくにお金の不安が大きい。大概の人にとって、経済的自立をもとめられる定年退職後の人生は、予想していたよりもずっとハードで、不安定なものだと思います。

ルソーは 1893 年 12 月、パリ市の入市税関を一級徴収吏として早期定年退職します。(上司のはからいで 1 級上げてもらったのですね)。49 歳のときでした。8 年間必死になって二足のワラジを履きつづけたお蔭で、十分とはいかなくても、それなりに画業に専念する自信をつけていたのでしょう。彼自身「両親でさえ気づかなかった私の中にあつた先天的な天分を伸ばす」ための、自然な成行きだったと語っています。

当時の状況は母親、しっかり者の妻クレマンス、長男、長女が先に死亡し、やむなく三女ジュリアをアンジェの姉に預け、次男のアンリだけを手許に置くというかなり切羽つまったものでした。職場ではわけもなく神がかりになったり (一説ではルソーは暗黒儀式を取り仕切る霊能力者)、情緒不安定になるところからみんなに嫌がられ「阿呆のルソー」などと呼ばれていました。

ですから、長年勤めた役所を辞めるのにさしたる未練はなかったようです。とにかく彼は自らの意思で決然と早期退職を申し出たのです。これ以上ぐずぐずしていたら、アートで自活の道を切り開くという当初の計画が、うまくまわらなくなると判断したのでしょう。アーリー・リタイヤメントを理想とするアメリカ人。退職芸術家を目指すフランス人。最後まで組織ぶら下がり願望の日本人ですかね。

### (アートによっていかにお金を得るか)

いきなり今日の本題ですが、アートで経済的にどこまで独り立ちしていけるかという、烈しくも切実な課題の一つについてお話ししましょう。

定年退職後、月給はもう入ってきません。かといって年金も決して十分ではありません。こればかりは、いまも 100 年まえも変わりません。収入と実際の生活費との歴然たる落差。このギャップをどうやって埋めていくか。ここから「わずかでもいいからアートでお金を稼ぐ方法はないか」という切実な問題が発生してきます。

現役時代にたっぷり生活資金蓄えられた人には無縁のテーマかもしれませんが、それほ

どでもなかった日曜画家には、生き残りを賭けたロシアン・ルーレットのように、本当に過酷な試練です。

ルソーは妻の実家が用意した自宅で暮らし、その近くのメヌ小路 18 番地にアトリエを借りていました。定年の年には、そのアトリエの近くに住居を移しています。多分退職芸術家の烈しい経済状況を予想して、ギリギリまで切りつめた生活へ舵を切り直したのでしょう。家族は 14 歳の次男アンリだけです。

ルソーは公務員としての退職金と 1019 フランの年金を受け取ります。この年金は当時、どの程度の額だったのでしょ。彼は美術評論家のウーデにこう話しています。

月 600 フランで画商と取引契約が結べたら、非の打ち所のない金満家の生活ができる。それが無理としても月 200 フランほどあれば下町の質素な暮らしなら、何とかやっつけていけるのだが…。

月 600 フランは年で 7200 フラン。月 200 フランは年で 2400 フラン。1019 フランは低い方の半分にも届きません。そこで彼はなるべく預貯金・退職金には手をつけず、月々 115 フランの不足を補うため、次のような営業品目を考え出しました。

- ・絵を売る。(アトリエで定期的に夜会などを開いて友人・知人をあつめ、絵の展示即売会を行う、画郎制度の不備) 世に有名なルソーの夜会です。実際「眠るジプシー女」をラヴァル市長に 2000 フランで購入するよう持ちかけたりもしています。でも残念ながら、当初売れた痕跡はほとんどありませんでした。
- ・絵の注文をとる。(ご先祖様の肖像画、金婚式・結婚式の祝い画、赤ちゃんの誕生祝い画、家の新築祝い画)「ピンク色の服の少女」、「砲兵たち」、「赤ちゃん、おめでとう」、「田舎の結婚式」などの作品には、確かに注文画の匂いはするのですが、果たして本当に受注していたかどうか。実態は分かりません。  
作品に即していえば、彼の絵は素人モデル独得の人間味あふれた味わいは濃厚ですが、顔がまずいですね。赤ちゃんが中年のおばさんみたいに怖い顔をして、こちらを睨みつけていたりしている。これで評判がよかったとは、ちょっと想像できませんね。
- ・商店の看板描き。これはそこそこ商売になったと思います。草月流の勅使河原蒼風も北大路魯山人も若いころは看板づくりで生計を立てています。でもいまはダメですね。看板そのものがお店から消滅しつつありますから。
- ・コンクールに応募して賞金を獲得する。実際ヴァンセンヌの市庁舎壁画コンクール、アスニエール市役所壁画コンクールなどいくつかに応募していますが、賞金にまで辿りついたという証拠はありません。コンクールと作家には相性みたいなものがあります。相性のいいところでは何度でも受賞する。恥ずかしがってはダメ。  
パブリックなコンクールは、いまはダメですね。ほとんどの自治体の財政が行き詰っていますから。とくに公園などに置く野外彫刻の分野がひどい。壊滅状態じゃないですか。
- ・アトリエにバイオリンとピアノを置き、ソルフェージュの個人レッスンをやる。これは実際何人が生徒がいたかもしれません。少なくとも当時ルソーは、絵描きとしてよりも

音楽家としての方がずっと高く評価されていましたから。

- ・ 絵画教室の出張講師をする。これは少し烈しい言い方をするとキャリア不足。とくに美術学校を出ていないことが痛かったですね。悪くすると無免許運転といわれてしまいます。その批判をかわすため、彼は「私自身、風景＝肖像画」という自画像の襟に勲章を描き加え、必死になって自らの権威を高めようとしています。自分を大きく描いてね。
- ・ 新聞の販売監督人をする。実際に「小さなパリ市民」というミニコミ紙の販売監督人をしていました。
- ・ その他ご近所の「便利屋」さんとして、頼まれれば何でもする。小さな工作物の依頼や修繕などは、大变得意だったようです。

こうした活動を反映してか、新たに用意した名刺には「芸術家、画家、装飾家」と印刷されていました。いまなら、さしずめインターネットによる通信販売、アートフェア開催なんかの項目も並んでいたことでしょう。私も大いに見習いたい。

一方支出の方は

- ・ 生活費、食費、家賃、アンリの養育費、接待費など。(家賃を切りつめるため、最後はアトリエで暮らしていたようです。もちろん家賃を絵で払う等という、ユニークな交渉もやったようですが。医療費、娯楽費は原則ゼロだったと思います)。
- ・ アート関係  
画材、額縁、運送代、展覧会宣伝費、モデル・花代、ピアノ調律、バイオリン代、楽団参加費等々。

ルソーの涙ぐましい努力にもかかわらず、月々のやりくりは非常に厳しく、家計はしばしば赤字に転落しました。そのとばっちりを受けたのが、フォワネの画材店です。画材費の不払い者筆頭はセザンヌとアンリ・ルソー。1901年にはルソーのもとに、フォワネから614フラン80サンチームの請求書が送りつけられてきます。さらにこれをきちんと払わなかったとあって、今度は追加の利子と訴訟費用まで負担させられています。

ですから晩年のルソーはあちこちに借金申し込みの手紙を乱発し、金銭トラブルだらけだったわけです。悪質な詐欺事件にも二度に渡って巻きこまれています。彼は事件の被害者ではなかったので、裁判ではいつも被告席でした。

でも、やがて事態は少しずつ変わっていきます。まず人の役に立とうという彼のギブ・アンド・テイクの精神が、みんなに理解されていきます。そして最晩年の63歳ごろには、ちょっと風変わりなナイーヴ作家として、彼を熱烈に支持する人たちが現れてきたのです。売れた作品をみてみましょう。

「飢えたライオン」 200フラン

「詩人に靈感をあたえるミューズ」 300フラン

「悪しき不意打ち」 190フラン

「虎と水牛の戦い」 200 フラン

これらの販売は、ヴォラール、ブリュメル、ウーデといった一流の画商・評論家たちが引き受けてくれました。注文は素朴派の新興国アメリカからも舞いこみはじめます。売上はルソーの生前でも年間 3600 フランまで行ったといえますから、誰も想像しなかった大逆転劇です。己の絵を固く信じた日曜画家アンリ・ルソーの輝かしい勝利とっていいでしょう。

プロの絵描きとは、雨の日も風の日も生涯に渡ってコツコツと絵を描きながら、同時に自分のファンを一人ずつ積み上げていく、気の遠くなるような作業をやる人のことです。しかもその仕事は、結局のところ他の誰でもない自分自身でやらなければならないということ、ルソーは実によく理解していたのでしょ

### (絵で認められるにはどうすればいい)

ルソーならずとも絵を描いている人なら誰しも、自分の作品がひろく世の中に認められたいと願うものです。アートで頭角を現わしたいというのは、絵描きなら当然の願望でしょう。まして退職画家として「アートで生計を立てたい」と熱望している人ならば、その欲求は人一倍であるはず

です。ルソーの場合には、なぜか「自分はアートで認められる」という固い自信があったようですね。自分勝手な幻想というか、思いこみもそこまで行くと、これはもう立派な才能という他ありません。それではその実現のため、彼は一体どんなことをやっていったのか、具体的にみていきましょう。

最初セーブル街の自宅で描いていたルソーは、やがて近所にアトリエを借りるようになります。理想的なアトリエを手に入れるため、彼は何とパリ市に「絵画研究のためのアトリエ獲得」という名目で補助金の交付まで申請しています。

大概の人と同じく、ルソーは西洋美術史への憧れが強く、決してそれに反抗しようとはしません。ある大きさの作品が描けるようになると、当時絶頂期にあったサロンへの出品を目論みます。そのためサロンで受けのよかったオリエント風物、「戦争」、「詩人に靈感をあたえるミューズ」などの寓話画法、「眠るジプシー女」、「蛇使いの女」、「夢」などの幻想的畫面構成、そして「ライオンの食事」などの異国趣味の研究を怠りませんでした。どれも当時のパリ市民に非常に好まれた傾向

です。これらは一見天真爛漫な思いつきにみえますが、実は用意周到な彼の絵画戦略でもあります。いったん目標を定めると、それに向かってわき目も振らず突っ走るのが彼のやり方。あまりに全身全霊で打ちこんだため「幻想的な絵を描いているとだんだん怖くなってきて、思わず窓を開けにいきました」とか「ジャングルの花の匂いがあまりに強いので、やっぱりアトリエの窓を開けました」といった言葉には、それがよく現れていると思います。

自分では日々、古典の名作に近づいていると信じて疑わなかったのでしょ

かなかサロンには入選しませんでした。ですからサロン・ドートンヌへは生涯で 2 度出品しただけで、代表作の大半は無鑑査のアンデパンダン展へ出されたこととなります。

このアンデパンダンという選択が最終的によい結果を生みました。団体やその仲間たちのレベルに不満をもつのではなく、自分にあった会で、自信をもって粘り強く発表しつづける。これが歴史上類をみないパントルナイーフの自由奔放な芸術を、短期間に生んだ原動力となります。

その他ルソーが実践したのは

- ・川と通り、公園等など、実際に熟知しているパリをテーマとする。
- ・エッフェル塔、熱気球、飛行機、船の通信旗など、近ごろ街でみかけるようになった新しい風物を、いち早く画面にとりこむこと。そして観客を存分に楽しませる。
- ・「戦争」など実際の事件に取材する。ただし現場を目撃していない場合が多いので、細密描写にはこだわらず、分からない場面は空想で補う。
- ・画中で自らパントマイムを演ずる。

さらには

- ・名画を自分流に模倣する。
- ・「なぞり」だけでなく、場合によっては「やつし」（現代流への置き換え）や「見立て」（まったく別物への置き換え）などの高等技法も駆使する。

つまり一言でいうと「観客を驚かせ」そして「楽しませる」、つまりサービスするということです。ルソーにとって真面目くさったり、深刻ぶった自己表現なんかは糞喰らえです。どんなに批評家たちから悪口をあびせかけられても、それは作品が人々を驚かせた証です。別の言葉でいえば、立派な成果にほかなりません。

無名の素人が、わずか 17 年で美術史上の巨匠にまで駆け上がったのです。この例でいえば、短時間で成果を挙げることも重要な要素です。定年退職者には、若い人に負けず劣らず時間の余裕がありません。「そのうち」とか「いつか」はないのです。いまここで決着をつける以外に、素晴らしい芸術を達成する道は残されていないと、肝に銘ずるべきです。

そこで思い起こされるのが江戸時代の浮世絵師・東洲斎写楽です。その作画期は寛政 6 年から 7 年にかけてのわずか 10 ヶ月。それでも彼は歴史上に燦然と輝く大肖像画家の仲間入りをしているのです。そこにはある秘密があります。今日からみて、描かれたの役者の名前はもちろん、芝居の演目、そしてそのなかのどのシーンなのか、あらかじめ判別できるという記録性です。

役者の顔かたちだけでなく、1974 年当時の現実がありのままに写し取られているのですね。いまでいえば、東日本大震災以後の社会状況を忠実に写しとった作品であれば、ときが経つにつれて価値が増してくるといった按配です。しかもこれは世界中から求められている。そこにチャレンジしている人は多いのですが、果たしてどなたが歴史に残るのでしょうか。

**(アートによって、いかに地域社会と結びつくか)**

さて、その現実主義ですが、絵描きたちが実際に地域とどんな関係を結んでいたのか、少し紹介してみたいと思います。それには私どものよく知らないパリの下町のお話を細々（こまごま）としても仕方がないので、いま私の事務所がある武蔵野市中町 1 丁目にかつて住んでいて、吉祥寺・三鷹地域を中心にアートを展開した版画家・織田一磨（明治 15 年～昭和 31 年）をみていくのが一番分かり易いと思います。

昭和 31 年、つまり今から 57 年まえに吉祥寺で亡くなった人ですが、彼はリトグラフで名を成したわが国でほとんど唯一の存在です。東京・芝公園の近くで明治 15 年に生まれています。それからいろいろあって、中町 1 丁目に越してきたのは昭和 6 年（1931）49 歳のときです。

歴史に名を残す大作家でありながら、土地の安かった吉祥寺に家とアトリエを建てたのでしょうね。そこから井の頭公園、中島飛行機や平山昆虫館へ通い、毎晩のように新宿、神楽坂にも出かけたそうです。ときには銀座まで足を延ばしてカフェやバーでブラブラ遊んでいたそうです。そのあたりが、ルソーにとってもよく似ていますね。とにかくハイカラで、モダンなものが大好き。気に入ったらお店でも街角でも、芝居でも片っ端から石版画にしていきました。

草創期の石版画というのは写真のかわりをしていたところがあって、石版画家はすなわちカメラマンみたいなものです。どこへでも行ってコンテでスケッチし、それをそのままリトグラフに写し取るといった按配です。ここに井の頭公園を描いた絵のコピーと実物の作品がありますので、ちょっとお見せしましょう。このほか作品には「中野村風景」、「落合風景」、「府中の町」、「石神井セミ博物館」、「吉祥寺付近の欅並木」、「江古田付近」、「吉祥寺方面長屋式集団住宅」などがあります。

彼は上背が 175 センチほどもあり、歩き方も一風変わっていたので、月窓寺のあたりを歩いていても吉祥寺の駅前からわかるほどだったと伝えられています。（私はちょっとオーバーに思えるのですが）

交友は広く、駅のまえでは絵描き仲間の上野碌郎が「喫茶店ナナン」を開いていました。店内ではよく長谷川利行とか堀田清治、恩地孝四郎などの作品展が開かれました。近くの志村書店では朴（ほう）の会という彼のグループの面々が、素人をあつめて版画教室を開いています。年賀状交換会なども活発にやったらしく、毎年秋元写真館で展覧会が行われました。

そのときの事務局長は志村浩という、これも名のある作家です。出品したのは塩出英雄（武蔵野美術学長）、大宮昇（炭山画譜、和歌山出身）、土井義信（ドイツ文学者）、深澤要（こけし研究家）など。

また近くにはバラック装飾社主人の飛鳥哲雄（高橋哲雄）さんとか、「こざさ」という甘いもの屋さんがあるのですが、そこのご主人伊神さん・娘の稲垣篤子さんとは友人で、包装紙はいまも織田一磨の笹の絵が使われています。一方駅の反対側にあった喫茶店ポアの包

装紙は、久我山に住んでいた東郷青児のものでした。駅から帰る途中にあった江藤純平（日展、光風会）の家には、しばしば立ち寄ったそうです。

家の周辺では鶴山小路というところに岸田劉生未亡人の持ち家があったのですが、そこに住んでいた武者小路実篤と親しく行き来しています。絵描きでは青龍社社人の小畠（おばた）夫妻・鼎子・広志がいました。俳人の中村草田男や文芸評論家の亀井勝一郎もいて、彼らの紹介で太宰治とつき合うようになったそうです。ちなみに私自身も高校時代、中村草田男の弟さんや詩人の那加太郎さんに国語を習いました。

そんな人たちとの交友が広がり、ついに昭和 11 年（1936）井之頭金曜会という勉強会が結成されます。当時駅前にあった武蔵野倶楽部（いまのすみれ幼稚園の辺り）というところで定期的に開催されていました。何でもヨーロッパから帰ってきた武者小路実篤が、帰朝講演会として「東洋画と西洋画」という話をしたのが始まりだったそうです。

以後吉原規・音楽について（昭和 12 年）、柳宗悦・民藝について、今和次郎・洋装の歴史、野口米次郎・印度風景、柳田國男・日本の風景、中西悟堂・野鳥の話、萩原朔太郎・詩に関する話、浅野研眞・シヤムより帰って、兼常清佐・音楽の話、金原省吾・東洋美術について、川路柳虹・詩の話、平山修次郎・蟲の話、藤懸静也・浮世絵について、前川千帆・漫画の話、さらに尾崎秀実、小島鳥水等につづいたといえますから、もう大変なものです。個人的勉強会をはるかに越えていますね。

あと当時荻窪に住んでいた棟方志功とは版画家仲間、荻窪の駅前にあった和菓子屋「金太郎」の包装紙は棟方のものだそうです。同様に平塚運一とは松江に長期間招聘される仲です。そうした生活のなかから「東京風景」、「大阪風景」、「画集銀座」、「画集新宿風景」などがつくられ、わが国最初の創作石版画家（自画石版）としての名声が生まれていったのでした。

織田一磨は草創期の石版画リトグラフ開拓者で、美術雑誌「方寸」の編集に関わったり、わが国の創作版画運動で主導的な役割を担った人です。ですからそちら方面にはまた、膨大な業績と人脈があるのですが、本日のテーマとは少しずれていくので、ここでは割愛させていただきます。

恐らくルソーも織田一磨も「退職画家として成功したければ、まず目の前のご町内のお世話からはじめよ」と叫んでいたでしょうね。それはやがて、時空を超えてグローバリズムや美術史上の評価へとつながっていくと主張したかったのだと思います。

### （アートによって、いかに円満な人間関係を維持・構築するか）

最後に、アートは人生の拠り所となるだけでなく、良くも悪くもその人の人間関係を規定するというお話をさせていただきたいと思います。一般的に言って、定年退職後は急激に人脈が細ります。これといってやることもありませんから、ぼーっとしていると社会からドンドン見放されてしまって孤独感が強まりますね。

その意味では、お金以上に大切なのが人間関係の輪を維持拡大していくことでしょう。なかでももっとも大切なのが配偶者との関係ではないでしょうか。退職画家が悠然と絵に打ちこめるのは、その影で配偶者がしっかりと支えてくれているからだと思います。

ルソーは生涯で二度結婚していますが、最初の妻はクレマンس・ボワタールという人です。大変なしっかりもので、実母と連携して、夢見がちなルソーをしっかりとコントロールしながら7人の子供を産み育てています。(そういえば織田一磨夫人のシズエさんも、なかなかしっかりした方だったのようですが)。

その間ルソーは職場と家庭が中心の、ある意味平凡で、いたってバランスのとれた日々を送ります。

両親でさえ、わたしと妻がおたがいに、なんと幸福なときを送ったことかといっているように、お互いのためにしか生きなかった純粋で神聖な結婚生活の二十年は私の人生の最良の年でした。だから私には張りがありました。二十四時間のつらい勤め(夜警のことです)を果たした後に来る休みの日を、絵を描いたり、病人たちを助けたり看病したりして過ごしました。幸いに私をとりまくものを私は愛していました。

と自ら語っています。ボランティアにも精を出して「ルソー神父の生活」と称していた時代ですね。彼は毎朝妻に水筒の入った黒いカバンを持たされ、背中をポンと押されたかどうかは知りませんが、市役所へ送り出されていたのです。

クレマンスがずっと元気でいたら、恐らく役所からの早期退職はなく、素朴派の巨匠アンリ・ルソーもこの世に誕生してはいなかったでしょう。でもその方が、ルソー本人にとっては幸せだったような口振りなので、われわれとしては実に奇妙な気持ちにさせられます。そのクレマンスは1888年に、結核で亡くなります。ルソーの心にはぼっかりと大穴があき、まるでそれを埋めるかのように、次々と女性遍歴がはじまります。一体どれくらいの女性とつきあったのかは定かではありません。大半は片想いの恋愛幻想だったのでしょうけれども。しかし、最後にジョゼフィーヌ・ヌーリというノルマンディーの女性が残ります。当時ジョゼフィーヌにはル・タンソレルというれっきとした夫がいました。ルソーは彼に烈しい対抗心を燃やし、とうとう「戦争」という大作のなかでル・タンソレルの死体を描いてしまいます。しかもカラスにその死肉をついばませるという残酷なおまけつきです。この呪いが功を奏したのかどうか、間もなくル・タンソレルは亡くなり、ルソーとジョゼフィーヌは晴れて結ばれます。

こうしたことは、ルソーが敬虔なクリスチャンというより、かなりはっきりとした反教会主義の人間であったことを表していると思います。そしてそのことは、彼の生き方の随所に顔を出してきているのですが、さぞいろいろなトラブルを引き起こしたことでしょうね。いずれにしても後妻さんを迎えて有頂天になったルソーは、「私自身、風景＝肖像画」という絵で、自画像が手にするパレットに、わざわざ「クレマンスとジョゼフィーヌ」と先妻・後妻の名前を並べて書き加えています。いまや「ジョゼフィーヌも私の妻なのだ」と社会的に宣言してみせたわけです。

さらにふたりの結婚を記念して、一枚の絵を仕上げます。ルソーとジョゼフィーヌが美しい庭に並んで立っているところです。そしてその幸せそうな二人の頭上には、何と若いころのルソーとクレマンズの顔が浮かび出ているではありませんか。(間違ってもル・タンソレルはどうした、どこに描かれていると訊かないでくださいね)

絵画には人と人を結びつける力があると、ルソーほど単純明快に信じた人はいないと思います。目にみえるものは、みえないものさえ支配するとでもいいかげなほど、強烈なアートへの帰依振りです。これをどのように受け止めるかは人によるでしょうが、アートというものが人間の魂に、一面で絶大な力を持っていることを、如実に指し示しているのではないのでしょうか。

退職画家が最終的に拠り所とするのは、学歴でも画歴でもなく、まさにこの辺りの人対人の吸引力にあるのではないのでしょうか。そのためルソーは「さかんに素朴派などと呼ばれているが、アカデミズムもナイーフもヘタウマもない。何であれ人の心を打つものを描きつづけなさい」といっているような気がしてなりません。

最後は、私のつまらない独断と偏見になってしまいましたが、あまり馬脚が現れないうちに、この辺で本日のお話しを終わらせていただきたいと思います。(了)